



司牧者がリレー形式で若者たちにぜひ読んでもらいたい書籍を紹介し、青年たちの読書感想文を掲載する連載。今回は、ジャンマリ・カゼンガ神父様(堺ブロック)が担当。

ジャンマリ・カゼンガ神父から
この一冊



『使徒的勧告 キリストは生きている』
教皇フランシスコ著、2019年発行、西日本出版社、税込1540円

私は2020年に青少年司牧委員会委員として任命されました。若者と関わり、これからも福音を伝えられることを嬉しく思います。先日のリスボンのワールドユースデーの閉幕に合わせて、ミサの中で教皇フランシスコは主の変容の福音から「輝く」「聞く」「恐れるな」という三つの動詞に基づいて若者にメッセージを伝えました。非常に心に響

く内容でしたので、よかったですら調べてみてください。

さて、今回それに関連して、私は教皇フランシスコの著書2冊お勧めしたいと思います。1冊目は『使徒的勧告 キリストは生きている』です。その中で教皇は次のように言われています。「若者の皆さん。皆さんの青年期の最高のものをあきらめないでください。シエルターの中から人生を見てはなりません。ソファを幸せと勘違いしたり、人生をずっと衝立(ついたて)の後ろで過ごしたりしてはなりません。捨てられた自動車のようなもの寂しい景色になってもいけません。動かない車になつてはなりません。ミイラ化した若者にならないように、あなた達をぐずぐずさせる不安を振り払いなさい。」(『使徒的勧告キリストは生きている』143) また、「神に出会うこと、つまりは、決定的に、熱烈に、神と恋に落ちること。これ以上に大切なことはない。」(『使徒的勧告キリストは生きている』132)と述べられています。



『使徒的勧告 喜びに喜べ』
教皇フランシスコ著、2018年発行、西日本出版社、税込990円

二冊目の図書は、『使徒的勧告 喜びに喜べ』です。その中では「聖なる者となるのに、司教や、司祭、修道者になる必要はありません。それぞれが置かれている場で、日常の雑務を通して、愛をもって生き、自分に固有のあかしを示すことで聖なる者となるよう、私たち皆が呼ばれているのです。」(『使徒的勧告喜びに喜べ』14)と述べられています。どちらの本も教皇様の素晴らしい言葉に触れることができ、若者がこれから生きていく上での指針を見出すことが出来る本だと思いますので是非読んでみて欲しいと思います。

次回は、Sr石川治美(はるみ) 大阪聖ヨゼフ宣教師道女会 です。

若者の読書感想文募集



- ① 年齢は35歳まで。カトリック信者、もしくはカトリック教会と何らかの関係がある方(カトリック校や諸施設の在籍者又は卒業生、保護者、関係者など)。
- ② 感想は400字程度。氏名、所属、顔写真(自由)を添えてメール(jiho@osaka.catholic.jp)か郵便にて送付(掲載にあたり編集する場合あり)。
- ③ 感想を送ってください。方全員に教区オリジナルしおり(4枚組)を進呈。たくさんのご投稿をお待ちしています。



ラジオ 信仰の時間

ヒロシマの記憶

〈8月6日放送分〉

ヌノ・リマ神父 (玉造教会主任)

わたしの中で日本に関する一番古い記憶は小学生の頃でした。

当時、ポルトガルでもソニーやトヨタ自動車は人気メーカーでしたが、それが日本のメーカーだと分かったのはもう少し大きくなってからのことです。

それより古い記憶は広島についてのものです。小学3年生のころに流行っていたポルトガルのポップソングです。そのタイトルは「Hiroxima, meu amor」(ヒロシマ・モナムール)でした。アラン・レネ監督のHiroshima mon amour、日本のタイトルは『二十四時間の情事』の映画からインスピレーションを受けたポップソングです。

時は1982年でした。20世紀の80年代は、冷戦時代の最中にありました。この時期、核の脅威が非常に高まっており、世界は核戦争の可能性に直面していました。ポルトガルでも、平和運動が広がり、核兵器廃絶を求める声が高まっていた。

小学3年生のころに流行っていたこの曲は、わたしが広島原爆による、悲劇を知るきっかけになった。原爆の悲劇の範囲とその深さは小学生のわたしには、あまり理解できなかったが、それ以前の戦争で使われたものよりも、はるかに力の強い爆弾だと、なんと

なく分かった。

数年後、日本に来る前に、今も記憶に残っている本を読んだ。戦前から日本で働いていたペドロ・アルペ神父様(イエズス会)の伝記だった。広島で原爆を体験した神父様の言葉は印象深かった。

アルペ神父様は、1907年にスペインのバスク地方で生まれた。大学は医学部だったが、19歳でイエズス会に入会し、1938年に日本に派遣された。そして、1945年8月6日、爆心地から4.5キロ離れていた広島にあった修道院で被爆する。彼は、すぐに事の重大さに気づいて倒れていた家具などを片付けて、けが人の救護に当たった。医学を勉強していた経験を生かし、ほとんど何の薬もない中で、手当てしたのだ。

ペドロ・アルペ神父様は広島についてこう書き残している。

「時計が止まった。天井やガラスの破片や梁がいまにも落ちて来そうであった。耳をつんざくような轟音がやんだ。私は床から身を起し、目の前にまだ吊り下がっている時計を見たが、時計は動いてはいなかった。朝の8時15分であった。あの止まってしまった時計が私には象徴のように見えた。広島は私たちの心に突き刺さっている。時間とは関係がない。不動の永遠に属している。悲しい永遠!

人間のあのような悲劇が絶えず存在するなんて! 人間の? いやそうではない、非人間的な悲劇だ。何十万人の命が無差別に奪われたからというだけでなく、

自分自身の技術を誇りたいための人間の自己破壊があり得るという前兆として、人類を脅かし続けているからである。時間はなんと多くのことを教えてくれることか! 歴史は人生の先生である。しかしそれは歴史を解釈できるという条件においてである。

広島(せんこう)の閃光は鮮明に残っている。人類にいつも突きつけられた剣のように。

このようにペドロ・アルペ神父様は、広島原爆を振りかえる。78年たった今も、広島平和記念資料館で同じような止まった時計が展示されている。戦争の悲惨さと平和の尊さを訴え続けています。戦争のない平和な世界を築き上げるには、私たち一人ひとりが常に平和の尊さを認識し、戦争がいかに多くの悲しみをもたらすかを、語り継いでいかなければなりません。

ウクライナの戦争などの世界的不安がある中で、歴史から深く学ぶべきことがたくさんあると思います。



毎週日曜日 5:50~6:00AM 放送
10月担当: 和越 敏神父 (かずこし びん じん せん ぷ)
ABCラジオ(朝日放送) AM1008/FM93.3
スマホアプリのradikoでも聴けます。